

小学校国語科教材の国語学的分析

——「大造じいさんとがん」の場合——

三 宅 清

1 はじめに

国語科教材と一口に言っても、小学校段階から高等学校段階まで、各出版社の教科書の別も念頭に置くと、多数に上る。本稿では、その中で、教育出版の小学校五年生用の教科書に取り上げられている「大造じいさんとがん」を分析対象とする。椋鳩十作の本物語は、昭和二十四年より今日までの長きに渉って教科書に採用されてきた息の長い作品である。しかしながら、今日見られるいわゆる指導案の類を見ると、教材分析（物語としての読み）の段階で必ずしも適切な分析がなされているとは言い難い。それは、取りも直さず従来の国語科教材の分析が文学的ないわゆる感性に頼ってきた弊害と言っても過言ではなかろう。これからの国語教師には、説明文であれ本稿で扱う物語であれ、より客観的で的確な読みが要求される。そこで本稿では、作品中の言葉（表現）にこだわった国語学的分析（国語学的な読み）を試みる。なお紙幅の関係上、本文全文は教科書を参照されたい。⁽¹⁾ 本稿では、教育出版の教科書における章立てに沿って論を進めていく。

2 第一章の分析

本章は、分析の観点として物語の一方の主人公である大造じいさんの呼称に注目した。すなわち、「大造じいさん」と記述されているか、「じいさん」と記述されているかである。⁽²⁾

本物語は、大造じいさんが計三回いわゆるわなを仕掛けるが、第一回目のわなを仕掛けるのが本章である。本章は、日の異なりにより、さらに三段落に分けられる。第一段落（5頁11行目まで）では、「大造じいさん」は二箇所、「じいさん」は一箇所用いられている。「大造じいさん」が用いられている二箇所の文、または前の文脈を見ると、次のようである。

残雪は、このぬま地に集まるがんの頭領らしい。なかなかりこうなやつで、なかまがえをあさっている間も、油断なく気を配っていて、りょうじゅうのとどく所まで、決して人間を寄せつけなかった。大造じいさんは、このぬま地をかり場にしていたが、いつごろからか、この残雪が来るようになってから、一わのがんも手に入れることができなくなったので、いまいまいしく思っていた。そこで、残雪がやってきたと知ると、大造じいさんは、今年こそはと、かねて考えておいた特別な方法にとりかかった。

二
三
一

下線部のように、「大造じいさん」の近くに「残雪」という記述があり、それらが対比的に描かれている。すなわち、〈「大造じいさん」は、「残雪」のためにがんと手に入れられなくなった。〉〈「大造じいさん」は「残雪」に対して特別な方法にとりかかった。〉という記述の仕方である。

ところで、残る一つの「じいさん」という記述についてだが、

じいさんは、ひとばんじゅうかかって、たくさんのうなぎつりばりをしかけておいた。

と、「残雪」との対比ではなく、「じいさん」独自の行動として描かれている。「大造じいさん」と「じいさん」という記述には、以上のような違いが見られる。そして、上掲の第一段落最後の「じいさん」という記述から、第二段落に掛けて「じいさん」の行動（心情）に焦点が移っていく。

また、第一段落は地の文がほとんどであるが、大造じいさんの残雪に対する心情としては、唯一、前掲の「（残雪に対して）いまいましく思っていた。」という記述がある。すなわち、この段階では、大造じいさんは残雪に対して嫌悪感を持っていたと言える。

第二段落においては、「じいさん」が四箇所、「大造じいさん」が一箇所見られる。「じいさん」の四箇所は次の通りである。

よく日の屋近く、じいさんは、むねをわくわくさせながら、ぬま地に行った。

じいさんは、つぶやきながらむちゅうでかけつけた。

じいさんは、思わず子どものように声をあげて喜んだ。

じいさんはうれしかった。

じいさんの行動、状態、そして「むねをわくわくさせながら」「むちゅうで」「喜んだ」「うれしかった」のように心情（特に喜びの心情）が表されている。これは、第一段落最後の「じいさん」からじいさん独自の行動（残雪との対比ではなく）に焦点が移っていったことと連関する。そして、第二段落唯一の「大造じいさん」という記述の後には、「じいさん」の後に見られたような大造じいさんの心情は見られず、また、第一段落に見られた残雪との対比でもなく、大造じいさんの行動が書かれているのみである。

大造じいさんは、たかが鳥のことだ、ひとばんたてば、またわすれてやってくるにちがいない、と考えて、昨日よりも、もっとたくさんのつりばりをばらまいておいた。

二二

「考える」は直接的な心情ではなく、また、この文の最終的な大造じいさんの行動は「ばらまいておいた」である。したがって、第二段落では、「大造じいさん」は単にその行動を表しているのに過ぎないのに対し、「じいさん」はその心情を表しており、前述の独自の行動への焦点移動から、よりその人の内面に入り込んだ描写と結びついていると言える。

また、前掲のように、第二段落の最後で「たかが鳥のことだ、ひとばんたてば、（わなを）またわすれてやってくるにちがいない」と大造じいさんが考えている

のは、がん、引いては残雪を見下している様子が伺える。「にちがいない」という確信を表す助動詞⁽³⁾にもその心情が表れている。

第三段落には、「大造じいさん」が二箇所、「じいさん」が二箇所使われている。第三段落の冒頭の「大造じいさん」は、

そのよく日、昨日と同じ時こくに、大造じいさんは出かけていった。
とあるように、単に「大造じいさん」の行動の中で使用されている。そして、直後に

秋の日が美しかった。
という一文があり、その後、

じいさんがぬま地にすがたを現すと、大きな羽音とともに、がんの大群が飛びたった。

じいさんは、「はてな。」と、首をかしげた。
という文章が続く。本章の「じいさん」の使われ方——大造じいさんに焦点が当てられ、特に大造じいさんの心情表現が伴っている——という特徴が、ここでも「じいさん」という呼称に関わりを持っているだろうか。その点について細かく見ていく。

7頁6行目の「いったい、どうしたことだろう。」は、「」付きではないが、明らかに大造じいさんの疑いという心情を表している。また、14行目からの「これもあの残雪がなかまを指導してやったにちがいない。」も大造じいさんの確信という一つの判断だが、やはり「」付きではない。この書き方をどのように解釈したらよいだろうか。「」付きの部分は、あくまでも地の文の中での作中人物の発話や心中を表したものである。それが無くて作中人物の心中を表しているということは、その周辺の文章全体が作中人物の立場に立って書かれているということの意味する。その点から周辺の文末表現を見ると、「……今日は一わもはりにかかっている。」⁽⁴⁾「……つりばりの糸が、みな、ぴいんと引きのばされてある。」など、いわゆる現在形で書かれている。この物語全体を通しての基本的な文体（文末表現）は、いわゆる「タ形」である。「タ形」は一般的に過去を表すが、この物語全体は過去のこととして書かれている訳ではない。過去の「た」を頻用したのは、作者が作者の現在から時間的に距離のあることとして作者と作中人物との立場を明確に分けたからである。それに対して、現在形を使っているということは、作者と作中人物との距離が近く、作者が作中人物の立場に立って書いているということができる。作中人物の立場に立てば、その心中は、当然直接的な表現形式が採られる。そして、ここで言う作中人物とは大造じいさんである。「じいさん」という呼称の場合、大造じいさんの心情を表している表現を伴うことは前述した。すなわち、この部分に「大造じいさん」ではなく「じいさん」が使っているのは大造じいさんの立場に立って書かれているからである。

一方、「大造じいさん」は、
大造じいさんは、思わず、感たんの声をもらしてしまった。

のように、「感たんの声をもらす」という一つの心情を表しているとも言える表現が続いている。しかしながら、前述の第二段落の「じいさん」に続く表現のように「喜ぶ」とか「うれしい」などの直接的な心情ではない。「感たんの」「声を」「もらす」のように分析的な表現である。換言すれば、より客観的な表現と言える。そのことは、すぐ後に続く、その感嘆の内容の書き方にも見られる。

がんとか、かもとかいう鳥は、鳥類の中で、あまりりこうなほうではないといわれていたが、どうしてなかなか、あの小さい頭の中に、たいしたちえをもっているものだな、ということ、今さらのように感じたのであった。

この中で、「ということ」という表現は、「と感じた」「と思った」のような単に「と」でその内容が直接引用される形式と違い、その内容が「こと」という名詞に収斂される。すなわち、一旦、「こと」という名詞に客体化されている訳である。その点からも第二段落の「じいさん」の場合とは違う。したがって、この場面では「じいさん」ではなく「大造じいさん」なのである。そして、第三段落冒頭の6頁11行目の「大造じいさん」と13行目からの「じいさん」との間に「秋の日が美しかった。」という一文がある。これは前後の文脈から見ると、唐突な情景描写である。情景描写は最も客観的な性格の記述と言える。この一文はとすると単なる情景描写として見過ごされがちだが、前述のような「大造じいさん」と「じいさん」との対比を考えると、第二段落終末部の大造じいさんの行動の客観的な描写から大造じいさんの立場での主観的な描写への転換点としての重要な役割を担っていると言える。ここに最も客観的な描写があることにより、直後からの主観的な描写をより際立たせる効果がある。

また、大造じいさんの残雪に対する心情の変化を見ると、前述のように、6頁8行目の「たかが鳥のことだ、……」のような「鳥（残雪?）」に対する評価は、「たかが」といういわゆる評価の副詞に表されているようにマイナス評価であるが、ここでは、前半の「がんとか、かもとかいう鳥は、鳥類の中で、あまりりこうなほうではないといわれていた」という評価に加えて、それだけではなく「どうしてなかなか」という逆接の機能を持つ表現を挟んで「あの小さい頭の中に、たいしたちえをもっているものだ」とプラスの評価に転じている。このことから、本章の終わりの時点では、本章第一段落の「いまいましく思っていた」に見られた残雪に対する嫌悪感はなく、自分と同等くらいの意識を持っていると考えられる。

3 第二章の分析

本章は全体的に文章量も少なく、また前章のように日の異なりによってさらに細かい段落に分けることはできない。前章と同じように呼称に注目すると、大造じいさんに対する呼称は四箇所見られるが、「大造じいさん」のみである。そして、特徴としては「大造じいさん」の記述の近くに「残雪」という記述が見られる。次のようである。

そのよく年も、残雪は、大群を率いてやってきた。そして例によって、ぬま

地のうちでも、見通しのきく所をえ場を選んで、えをあさるのであった。
大造じいさんは、夏のうちから心がけて、たにしを五俵ばかり集めておいた。
りょうじゅうをぐつとにぎりしめた大造じいさんは、ほおがびりびりするほどひきしまった。
ところが、残雪は、油断なく地上を見下ろしながら、群れを率いてやってきた。
……またしても、残雪のためにしてやられたのだ。
大造じいさんは、広いぬま地の向こうをじっと見つめたまま……

残りの一箇所は

がんの群れは、思わぬごちそうが四、五日も続いたので、ぬま地のうちでも、そこがいちばん気に入りの場所となつたらしい。

と書かれている。「残雪」という記述は見られないが、「がんの群れ」という記述がある。このがんの群れは残雪が率いていることは本章第一行目の「そのよく年も、残雪は、大群を率いてやってきた。」から明らかである。すなわち呼称から言えることは、本章は、大造じいさん——残雪を対立軸として前章よりもより明確に打ち出していることが伺い知れる。また、前章の「大造じいさん」という呼称とそれに続く表現の特徴——大造じいさんの行動についての客観的な表現——から考えると、本章は、おおまかに言えば、大造じいさん——残雪という対立軸の上に立った作者の立場からの客観的な描写が基調をなしていると言える。そのことは、文の種類として、本章が主に作者の立場に立つ地の文が中心であることと大きな関連性を持つ。しかしながら、その中からも、当然作中人物の心情の変化は読み取れる。

大造じいさんの前章からの心情の変化として、わなの仕掛け方についての変化が指摘できる。本章の3行目に次のような記述がある。

大造じいさんは、夏のうちから心がけて、たにしを五俵ばかり集めておいた。
それを、がんのこのみそうな場所にばらまいておいた。

この中で、筆者が特に注目するのは「夏のうちから心がけて」である。前章でやはり「わな」を仕掛ける場面（5頁）では「かねて考えておいた」とある。両表現の違いは、「夏のうちから」の期日がより具体的なのに対して、「かねて」は期日が漠然としている。そこから、本章では、前章より大造じいさんがより明確な態度で用意周到に「わな」を仕掛けたことが分かる。その気持ちは「心がけて」という表現にも表れている。ここにも前述した前章と本章における大造じいさんの残雪に対する評価の違い（評価が高くなっている）が見て取れる。

そして、大造じいさんは、そのわなに対してがんが反応を示したことに気付き、単純に喜ぶのである。それは「案の定」「会心のえみをもらした」などの表現から読み取れる。わなを仕掛けて、それに対してがんが少し反応を示し（大造じいさんの思い通りにいきそうなので）、大造じいさんが喜ぶという構成は前章と同じである。ここに大造じいさんに見られる感情の起伏＝人間らしさが表されている。

る。しかしながら、その反応に対して見せた大造じいさんの態度は前章とは違い、猟銃を使うという方法である。しかも「あの群れ（残雪が率いているがんの群れ）の中に一発ぶちこんで、今年こそは、目にもの見せてくれるぞ。」という記述に見られるように、がんと捕らえるというより、残雪一羽を狙っている（そのことは後章を読むとよりはっきりする）。前述の本章での両者の呼称に見られた「大造じいさん—残雪」という対立がより鮮明になったことが、このようなわなの仕掛け方やそれに引き続いての行動からも指摘できる。それに加えて、残雪を狙うことに対する一所懸命さも

りょうじゅうをぐっとにぎりしめた大造じいさんは、ほおがびりびりするほどひきしまった。

という記述の単に「にぎる」ではなく「ぐっとにぎりしめた」や「びりびりするほど」にも表れている。それは、前章で失敗していることとそれを踏まえての用意周到さに繋がる。しかしながら、それに対して残雪のとった行動は大造じいさんの予想に反するものであった。上掲の記述に引き続いて次のような記述がある。

ところが、残雪は、油断なく地上を見下ろしながら、群れを率いてやってきた。そして、ふと、いつものえ場に、昨日までなかった小さな小屋をみとめた。「ところが」から、それに続く残雪の行動が予想外だったということがわかる。それは、残雪が「油断なく地上を見下ろしながら」やってきたことである。さらに残雪は前述のじいさんが一所懸命に残雪を狙っている小屋を「ふと」（＝何気なく）見付けてしまう。この「ふと」は、大造じいさんの一所懸命さと対照して重要な意味を持っている。端的に言えば、大造じいさんの一所懸命さは人為であり、それを「ふと」見付けてしまう残雪の行動は本能である。そのことは上掲の記述に続く

「様子の変わった所には近づかぬがよいぞ。」かれの本能は、そう感じたらしい。

の中にも見られる。この残雪の心内文は、本物語中唯一、残雪の心中を直接的に表したものである。「近づかない」ではなく「近づかぬ」、「いいぞ」ではなく「よいぞ」、「近づかぬが」と、連体形「ぬ」が名詞を伴わず名詞相当の機能を果たしている準体句が用いてあることなど、いわゆる文語的な表現が多用されている。このことは大造じいさんの心内文にはほとんど見られない。大造じいさんの心内文はいわゆる口語的な表現が多く、それだけ読者の使用言語に近いということもあり、身近で生き生きとした感、あるいは人間としての自然な感情の起伏が感じられる。それに対して文語的な表現は、読者の使用言語から遠く、生き生きとした感ではなく、冷たい、換言すれば冷静な感を与える。この冷静さが少なくともここまでの残雪に一貫して見られる行動原理である。そしてそれが前述の本能であり、それと対照的な大造じいさんの行動は結局はかなわない。そこで、

「ううん。」とうなってしまった。

という結果になる。この表現は前章終末部の

「ううむ！」大造じいさんは、思わず、感たんの声をもらしてしまった。
と類似している。異なるのは、声の「ん。」と「む！」、「うなる」と「感たんの
声をもらす」という点である。「む」という両唇音にも拘わらず声がもれる程の
強い感嘆ということが言える。さらに感嘆符が付いていることもそのことを補強
している。それに対して「ん」は、N音なので「む」よりは声が口外に出ている
と言えるが、「うなる」は低い声が続く状態なので、前章のように、単なる感嘆
だけではなく、より沈んだ気持ち、落胆を表している。それは、残雪の能力を自
分より上に見ていることにも通じる。

4 第三章の分析

本章は終章となる第四章の前段階としてかなりの長さを有している。なかなか
段落に分けにくい章でもある。本章の読後感として、最初は緩やかな展開、途中
から早い展開という感を受けるかと思われる。そのことについて表現に沿って述
べてみたい。最初の行に

今年もまた、ぼつぼつ、例のぬま地にがんの来る季節になった。

と、「ぼつぼつ」という「物事が漸次に進む様」を表す語が用いられている。ま
た、大造じいさんが新たなわなを仕掛けるに当たって

「今年は、ひとつ、これを使ってみるかな。」

という独り言を言う。その中の「ひとつ」は「試みに。ちょっと。」というよう
な意味で、決して切迫感を表す語ではない。この「ひとつ」は次頁にも用いられ
ている。

また、本章の最初は「じいさん」という呼称が使われている。その理由は、第
一章での「じいさん」のような大造じいさんの内面を表しているのではなく、大
造じいさんがわなとして飼っているがん中心の描写になっているからである。例
えば次のようである（〈 〉内は三宅の補い）。

このがんは 〈＝このがんについて言えば〉、二年前、じいさんがつりばりの
計略で生けどったものだった。今ではすっかり〈がんは〉じいさんになつ
ていた。ときどき、にわとり小屋から運動のために外に出してやるが、ヒュ、
ヒュ、ヒュと口ぶえをふけば、どこにいても〈がんが〉じいさんの所に帰っ
てきて……（11頁）

そして、このような大造じいさんの飼っているがんは本章冒頭が初出なので、そ
のがんの紹介的な文章になっており、そのことも緩やかな展開の一因となってい
る。また、この緩やかな展開は、同時にじいさんの心中の動きにも表われている。
それは今まで二回じいさんは残雪にしてやられているのだが、それは第二章で残
雪（鳥＝動物）の本能に負けたということを大造じいさんが悟り、意図的に冷静
さ（落ち着き）を保っていることも意味する。そのことは、その後、残雪がやっ
て来たと聞いてからの大造じいさんの行動に表されている。大造じいさんががん
たちの餌場を認めて

「うまくいくぞ。」

大造じいさんは、青くすんだ空を見上げながらにっこりした。

という描写と、

さあ、いよいよ戦とう開始だ。

という残雪との対決が差し迫った際の大造じいさんの心中描写直後の

東の空が真っ赤に燃えて、朝が来た。

との違いにまず表れている。⁽⁶⁾同じ空の描写ながら、一方は「真っ赤に燃えて」であり、一方は「青くすんだ」である。この色を中心とした違いについては注目しなければならない。「真っ赤に燃えて」は前述のように、残雪との対決が差し迫ったじいさんの気持ちの高ぶり、興奮を示しており、それに対して、「青くすんだ」は今度のわなは「うまくいく」というじいさんの一点の不安もない自信（確信）と冷静さ、落ち着きを示している。それに続く「にっこりする」という行為も、同じ喜びを表す語でも、第一章のような「喜ぶ」「うれしい」といった感情を直接的に表す語ではなく、余裕（落ち着き）が含まれている語が用いられている。

一方、残雪に関しての空の描写は、前述の「東の空が真っ赤に燃えて……」の直後に

残雪は、いつものように、群れの先頭にたって、美しい朝の空を、真一文字に横切ってやってきた。

とあるように、色に関する記述はなく、単に「美しい朝の空」とある。また、同じ文中の「いつものように」「真一文字に横切る」なども、前のわなの件があるにも関わらず、それを一向に気にしない淡々とした冷静さが読み取れる。それに引き続く大造じいさんに関する記述は

やがて、え場におりと、グワー、グワーという、やかましい声で鳴き始めた。大造じいさんのむねは、わくわくしてきた。

とある。残雪が相変わらず冷静なのに対して、前掲の「さあ、いよいよ戦とう開始だ」「東の空が真っ赤に燃えて」などの記述も含めて、気持ちがかなり高ぶっている様子が描かれている。前章までだとかこの気持ちの高ぶりがそのまま引き続いて、それによって結果的に残雪に負けてしまうのだが、今回の大造じいさんの行動は違っている。前掲の「わくわくしてきた」に続いて

しばらく目をつぶって、心の落ち着くのを待った。そして、冷え冷えするじゅう身を、ぎゅっとにぎりしめた。

一
一五

と記されている。第一文から分かるように、冷静さを保とうと努力している。また第二文からもその態度は伺える。「冷え冷えする」は季節的に秋でもあり、早朝でもあるので、その寒さを単に表しているとも考えられるが、10ページのやはり「りょうじゅう」が出てくる場面では「りょうじゅうをぐっとにぎりしめた」と「りょうじゅう」に特に修飾句は付いていない。同じ季節、同じ時間帯にも拘わらず、一方には修飾句があり、一方にはないとすれば、それは単なる偶然ではなく、その修飾句には何らかの特別な意味を持っていると考えられる。そうなると、

「冷え冷えする」は、暑い＝気持ちが高ぶっているの逆の状態、すなわち冷静さを表しているのではないか。さらに「じゅう身を、ぎゅっとにぎりしめた」という動作からも大造じいさんの冷静さを保とうとする態度が表れている。前章での「りょうじゅう」に関する記述は「りょうじゅうをぐっとにぎりしめた」であった。「りょうじゅうをにぎりしめる」というおおまかな動作は同じであるが、一方は猟銃全体であるのに対し、一方は銃身であるところが異なる。それは各々の擬態語の「ぐっと」と「ぎゅっと」との違いにも表れている。小学館の『日本国語大辞典』に拠ると、「ぐっと」は

力をいれて、また、一息に事を行なうさまを表わす語。

とあり、「ぎゅっと」は

力をいれて、強く、締めたり押えついたり、握ったり、……

とある。以上の記述から考えると、両語とも「力をいれる」ことに変わりはないのだが、「ぐっと」が主に「力をいれる」に焦点が当てられている語なのに対し、「ぎゅっと」はそればかりではなく「締める」「握る」など、「ぐっと」に比べると動作が限定されており、それだけそれらの動作の対象物もより限定されてくる。今問題にしている箇所而言えば、「ぐっと」の対象は猟銃全体なのに対し、「ぎゅっと」の対象は猟銃の銃身に限定される。そして、その擬態語の違いからも導き出される各々の動作の違いは、前章の場合は、まさに残雪に向けて（残雪を狙って）銃を撃とうとしているのに対し、本章の銃身を握りしめている動作は直ぐさま銃が撃てるという体勢ではない。このことから、本章のこの場面では大造じいさんは高ぶる気持ちのまま直ぐに撃とうとはせず、その気持ちを押さえて冷静さを保とうとしていることが分かる。この冷静さは、残雪の冷静さを十分意識してのことだと分かる記述が前掲の記述の後に見られる。

「さあ、今日こそ、あの残雪めにひとあわふかせてやるぞ。」くちびるを二、三回静かにぬらした。

「くちびるを静かにぬらす」はもちろん気持ちの高ぶりを静めるための行為である。それも二、三回繰り返すのだからなおさらである。そしてその前の大造じいさんの会話中の「ひとあわふかせてやる」は、残雪をあわてさせる（＝冷静さを失わせる）ということである。これらの記述からも大造じいさんは残雪の冷静さを意識して自分の気持ちの高ぶりを押さえていることが分かる。

本節の冒頭で「緩やかな展開から早い展開へ」ということを述べたが、前述のような大造じいさんの気持ちの高ぶりは早い展開へと転じる要素を含んでいる。しかしながら、前章までとは違って、気持ちの高ぶりをそのまま行動に移すのではなく、冷静さを保とうとしている点で急激に早い展開になることが結果的に押さえられている。本格的に早い展開が見られるのは13頁9行目の「と、その時、ものすごい羽音とともに、がんの群れが、一度にばたばたと飛びたった。」からである。がんや残雪とはやぶさとの対決など、内容的に緊迫した、その意味での一種の早さの要素が含まれているのはもちろんだが、本稿では、副題にもあるよ

うに、国語学的、すなわち言葉や表現という点から「早い展開」について見ていきたい。

まず第一点は接続詞である。前述の13頁9行目の「と」にも見られるように、語形の短い接続詞が他の章に比べて多用されている。その他にも逆接の「が」が三箇所見られる。「と」はいわゆる順接の接続詞であるが、同様の機能を果たす語としては「すると」等がある。また、逆接の「が」も「ところが」「しかし」「けれども」等が同様の機能を有している。順接にしても逆接にしても次の文への一定の展開という点では同じ機能を持っている。これらの接続詞がなくても後文の意味内容との関係で一定の展開は可能であるが、接続詞があれば、順接、逆接などの関係がより明確になる。しかしながら、その語形があまり長いと展開が冗長になりがちである。関係を明示しながらも早い展開を感じさせるためには語形の短い接続詞が必要になる。以上の点から、早い展開を感じさせる一つの要素として語形の短い接続詞の多用が挙げられる。

次に第二点として擬音語、擬態語が挙げられる。例えば14、15頁では「ピュ、ピュ、ピュと」「パーンと」「ぱっと」「さっと」が見られる。いずれも時間的な面では早さを表す語である。これらの語は、各々が付随する動作の主体がすべて異なっており、しかも各々の動作が連続している。具体的には「大造じいさんが飼っているがんを呼ぶために口笛をピュ、ピュ、ピュと吹く」→「その口笛を聞いて大造じいさんの方へ向かってくるがんをはやぶさがパーンと蹴る」→「蹴られたがんの羽毛がぱっと散る」→「がんを救うために、はやぶさの前をさっと残雪が横切る」という連続である。このような動作の連続性は、連関のない動作の羅列に比べ、ある一定の展開を示しており、さらに同一人物の動作が続いているより動作の主体が目まぐるしく変わる方が展開としては早くなる。「いきなり」「不意を打たれて」などの早さを表す語、表現も用いられているが、それはごく僅かで、早い展開を感じさせるのは、以上のような擬音語、擬態語を中心とした表現形式に負うところが大きい。

第三点としては、文体の問題が挙げられる。はやぶさが現れたあたりから、文体（文末表現）が、この物語の基本的な文体である「タ形」からいわゆる現在形になっている。

がんの群れを目がけて、白い雲の辺りから、何か一直線に落ちてくる。はやぶさだ。がんの群れは、残雪に導かれて、実にすばやい動作で、はやぶさの目をくらしながら飛び去っていく。「あ！」一わ飛びおくれたのがいる。大造じいさんのおとりのがんだ。長い間かいならされていたので、野鳥としての本能が、にぶっていたのだ。

基本的な「タ形」からいわゆる現在形への転換は、第二節で述べたように、元来の時間的な距離から様々な面での距離が近くなったことを表している。第二節では作者と作中人物との距離であったが、本章では作者とその場面である。作者とその場面との距離が近いということは、作者がまさにその場面に遭遇しているか

のような臨場感を読み手に与える。その臨場感が、本章において、特に早い展開に転換していくはやぶさが登場する場面で表されていることは、より早さを増幅させ、その後の早い展開の先鞭として効果的である。

以上の三点から、本章で、特に「早い展開」と意識される、その「早さ」という感覚が説明できる。

本章では、前章までと違い、大造じいさんのわなは成功したと言える。大造じいさんは残雪を撃とうとすれば撃てる状況にあった。それに対して、はやぶさによって怪我を負った残雪が取った態度は次のようなものであった。

……残りの力をふりしぼって、ぐっと長い首を持ち上げた。そして、じいさんを正面からにらみつけた。

この記述を承けて次の記述が続く。

それは、鳥とはいえ、いかにも頭領らしい、堂々たる態度のようであった。

大造じいさんが手をのばしても、残雪は、もうじたばたさわがなかった。それは最期の時を感じて、せめて頭領としてのいげんをきずつけまいと、努力しているようでもあった。大造じいさんは、強く心を打たれて、ただの鳥に對しているような気がしなかった。

最後の「強く心を打たれた」のは前掲の「残りの……にらみつけた」という態度だということは、上掲の「それ」という指示詞の指示内容から分かる。大造じいさんは、残雪が自分の飼っていたがんをはやぶさから助けたことに対して「強く心を打たれた」のではない。そしてその態度に対して、作者は「鳥とはいえ」「頭領らしい」という表現を用いている。「とはいえ」は『日本国語大辞典』に拠ると先行の事柄に対し、それを確認しながらも、それに反したり矛盾したりする事柄を述べるときに用いる。

この場合、先行する事柄とは「残雪が鳥だということ」である。そしてそれに反したり矛盾したりする事柄とは「いかにも頭領らしい、堂々たる態度であるということ」である。すなわち残雪は鳥ではあるが、鳥とは思えない、頭領らしい、堂々たる態度であったということになる。そこで、「頭領」という語を同じく『日本国語大辞典』で調べると、

ある集団を統率する立場の人。

とある。そこから「頭領」は本来「人」を指す語であることが分かる。前述の「とはいえ」と合わせ考えると、この時点での大造じいさんの残雪に対する心情（評価）は、残雪は鳥ではあるが、その態度は人間のようなものであるということになる。前節で述べたように、前章において大造じいさんの仕掛けたわなが失敗した時点で、すでに大造じいさんは残雪に対して感嘆を表しており、能力的に自分よりやや上くらいの意識があったと思われるが、その感嘆はあくまで人間対鳥の関係だったのに対し、ここでは感嘆は感嘆でも、それが人間対人間という関係に変化している。そのことは本物語の最終章である次の第四章にも引き継がれている。

—
二—
—

5 第四章の分析

前節の最後に述べたように、大造じいさんと残雪との関係が人間対人間の関係に変化しており、しかもその関係に一種の信頼感が生じていることは本章に見られる表現から見て取れる。

前章で傷ついた残雪は、大造じいさんに一冬世話を受けることになるが、傷が治り、檻から飛び立つ残雪に関わる記述は次のようになっている。

らんまんとさいたすももの花が、そのはねにふれて、雪のように清らかにはらはらと散った。

「清らかに」はすももの花の散る様子を示していると思われるが、その様子の形状面は「雪のように」という比喻で表されており、様態は「はらはらと」という擬態語（いわゆる様態副詞）で表されている。すももの花の散る様子を客観的に描写するだけなら「雪のようにはらはらと散った」で十分なはずである。「清らかに」は、その客観的な描写に付加された作者のどちらかと言えば主観的な表現と言える。「清らかに」は、言うまでもなく、さわやかな様子を表す。そして、そのような表現をここで敢えて用いたのは、前節でも触れた、前章の最後の大造じいさんに対して敵愾心を持っていた残雪の態度（心情）が、一冬世話を受けたことにより、以前のわだかまりがなくなり、すっきりとさわやかなものへと変わったことを示すためと考えられる。また、飛び立つ残雪を見送る大造じいさんに関わる記述も

……残雪が北へ北へと飛び去っていくのを、晴れ晴れとした顔つきで見守っていた。

とあり、前掲の「清らかに」に対応して「晴れ晴れとした」という表現が用いられている。すなわち、この時点では、両者の間には、以前のような嫌悪感のようなわだかまりはなく、一種の信頼感が生じていたと言える。その信頼感は、大造じいさんが残雪に呼びかける発話の中の語からも看取できる。

そうして、おれたちは、また、堂々と戦おうじゃあないか。

「おれたち」という語は、明らかに大造じいさんが残雪を自分の仲間として認識して用いている。仲間意識は信頼感に基づいた気持ちである。また、そのような信頼感からは当然愛着心も生まれてくる。その愛着心が

一 残雪が北へ北へと飛び去っていくのを、晴れ晴れとした顔つきで見守っていた。
二 いた。いつまでも、いつまでも、見守っていた。

の中の表現に表れている。その一つとして、例えば「北へ」だけではなく「北へ北へ」と「北へ」を二度繰り返している箇所が挙げられる。「北へ」と一度だけなら単に方向を示しているだけだが、「北へ北へ」と二度繰り返すことにより、時間的な継続性が表されることになる。「いつまでも」も、その語が持つ意味自体が時間的な継続性を有しているが、それをさらに二度繰り返すことにより、より長い継続性を表すことになる。その継続性は「見守る」という動詞にも含まれ

ている。このように長い間、大造じいさんが残雪を見ているのは、やはり残雪に対して、名残惜しさ、換言すれば、強い愛着心を持っているからであり、その根幹には前述した信頼感、それも人間同士の信頼感が存するからに他ならない。

6 おわりに

以上のように、国語科教材「大造じいさんとがん」を国語学的に、すなわち「言葉（表現）」を基に分析した。その観点は、語彙、文体、音韻など様々で、統一的ではない憾みもあるが、従来の文学的な、換言すれば感性に頼ることが多かった曖昧な読みに対して、よりの確な読みを提示できたと思う。また、本教材の目標として多くの指導書に挙げられる「人物の心情の移り変わり」は、本教材では、大造じいさんの残雪に対する心情の移り変わりと言い換えられるが、本稿の国語学的な分析に拠ると、それは「嫌悪感→見下す（自分以下の評価）→感嘆（自分と同等の評価）→感嘆（自分以上の評価）→人間として評価→人間としての仲間意識（信頼感、愛着心）」という移り変わりという結論が得られた。国語科教材の国語学的な分析は教科の性格上、本来的な方法と考えられるが、従来看過されてきた。本稿で用いた方法が、国語科教材の読みに関して一石を投じられれば幸いである。

注

- (1) 引用文は教育出版の原文のままである。ただし、行は改めた所があり、振り仮名、傍点は省いた。
- (2) 以下、特に呼称を指す場合は「 」で示す。
- (3) 例えば寺村秀夫氏は、「にちがいない」を二次的ムードの助動詞と位置づけている（『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版、1984）。
- (4) 教育出版の教師用指導書（1996）では、初出本（『動物物語大造爺さんと雁』（『少年倶楽部』1941・11）は常体なのに対し、作者が手を入れて、初刊本（『大造爺さんと雁』（『動物ども』三光社、1943・5）では敬体にしたとある。教育出版の教科書は他の教科書と違い、常体の方を採用し、それは歯切れのよさを与えるからと記しているが、歯切れのよさが感じられるのは、常体にあるのではなく、「タ形」によって生じる作者と作中人物との距離感（作者のきわめて客観的な書き方）と「た」の語感にあると考えられる。ちなみに「光村図書」「東京書籍」の教科書は敬体である。
- (5) 前掲指導書では、単に「大造じいさんの心を投影した情景描写。」と触れているのみである。
- (6) 前掲指導書でも、「大造じいさんの心の投影」と指摘している。
- (7) 題名が「大造じいさんとがん」であり、「がんと大造じいさん」ではないのも、大造じいさんを中心とした作者の執筆態度が見て取れる。物語中、「がん」の行動、気持ちに対して「ようだ」「らしい」が用いられていることもそれと関連する。

（本学助教授・初等教育）